編集者のことば

『総合都市研究』の第25号は，1984年世田谷洞道内電話ケーブル火災が社会に及ぼした影響に関する幾つかの側面（一般家庭・事業所・独居老人など）に対する調査研究論文２編と，それに併行して調べられた独居老人の生活と心理に関する論文，並びに第22号で特集された神津島を対象としての都市的生活様式の実証研究（続報）の４編の論文と，アメリカにおける障害者・老人の利用を考慮した交通施設の歴史と概観（英文論文の全訳…資料）からなる。

すなわち，Key word 的に本号の内容を表現すれば，通信ケーブル火災事故／ハンディキャップ者／都市的生活様式，となり，複数の名を冠し特集号とすることも編集委員会で議論された。ところで，特筆したいのは第23号「特集　都市防災研究（その８）」の「編集にあたって」で防災研究面でも本学の理工系の研究者と人文・社会系等の研究者の協力による真の学際研究が生まれる日は近いと信ずると述べたが，本号でそれが早くも論文の型で公にできたことである。防災研究にかぎらず，このような研究動向が着実に発展することは確かである。そうでなければ，あまりにも諸々の事象が複雑に絡み合った都市問題などに到底立ち向えないし，本センターの将来像さえ描けない。

編集者が本誌について改めて述べておきたいことがある。それは，本誌の二面性，つまり，学術誌であるとともに行政等の諸々の実践者に是非読んで欲しいという期待である。故に，本誌はそれに応えるべく，なお一層の努力をしたい。

本号に載せられた翻訳資料は，そのような姿勢の一端である。このような大部の論文全訳を収録したのは，老人（ハンディキャップ者といいかえてもよい）蔑視の風潮があるといわれている高齢化先進国アメリカにおける障害者の市民権要求運動の歴史と現況を主なるテーマとしており，原文はきわめて難解，かつ一般に入手し難く，むしろ行政面から釈訳して欲しいとの声があったからである。

最後に，本号は『総合都市研究』のなお一層の充実を企る一過程にあり，構成の不統一性等は十分承知している。この点は，今後，順次改善していく所存であることをお断りしたい。

（望月利男）